

野多目B遺跡 2

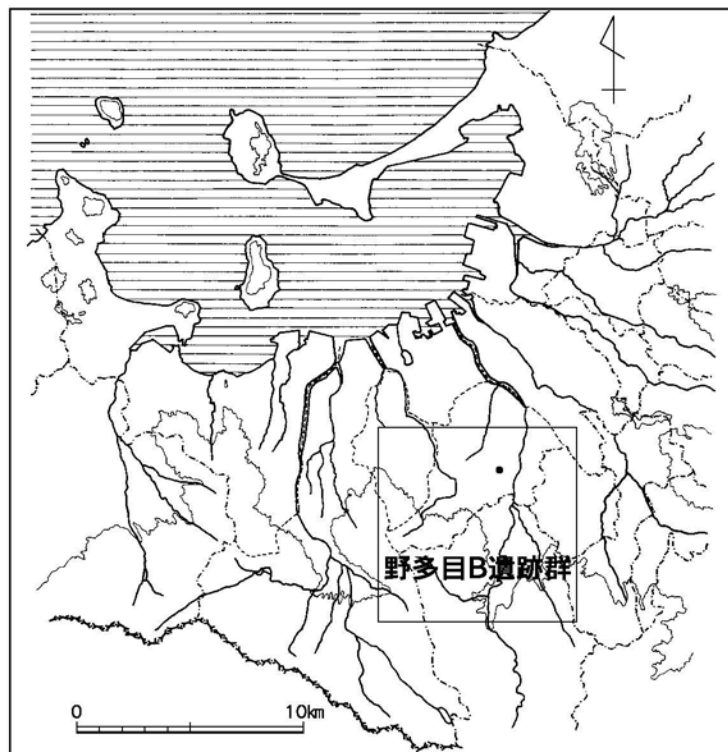
— 野多目遺跡群第2次調査報告 —

2008

福岡市教育委員会

野多目B遺跡 2

— 野多目遺跡群第2次調査報告 —



遺跡略号 NMB-2
遺跡調査番号 0653

2008

福岡市教育委員会



1. 野多目B遺跡群第2次調査全景（南から）



2. SC-4（北西から）



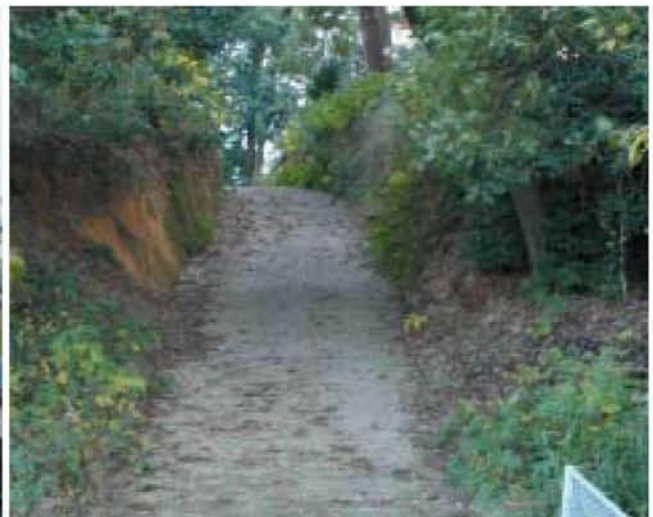
1. 昭和49年度撮影の遺跡付近航空写真(上が北)
 国土画像情報(カラー空中写真)国土交通省
 整理番号C KU74-24 C12-19をトリミングして使用



2. 照天神社本殿(東から)
 写真奥の林中に第2次調査地点あり



3. 野多目B遺跡群第1次調査地点を望む(南から)
 照天神社境内から撮影



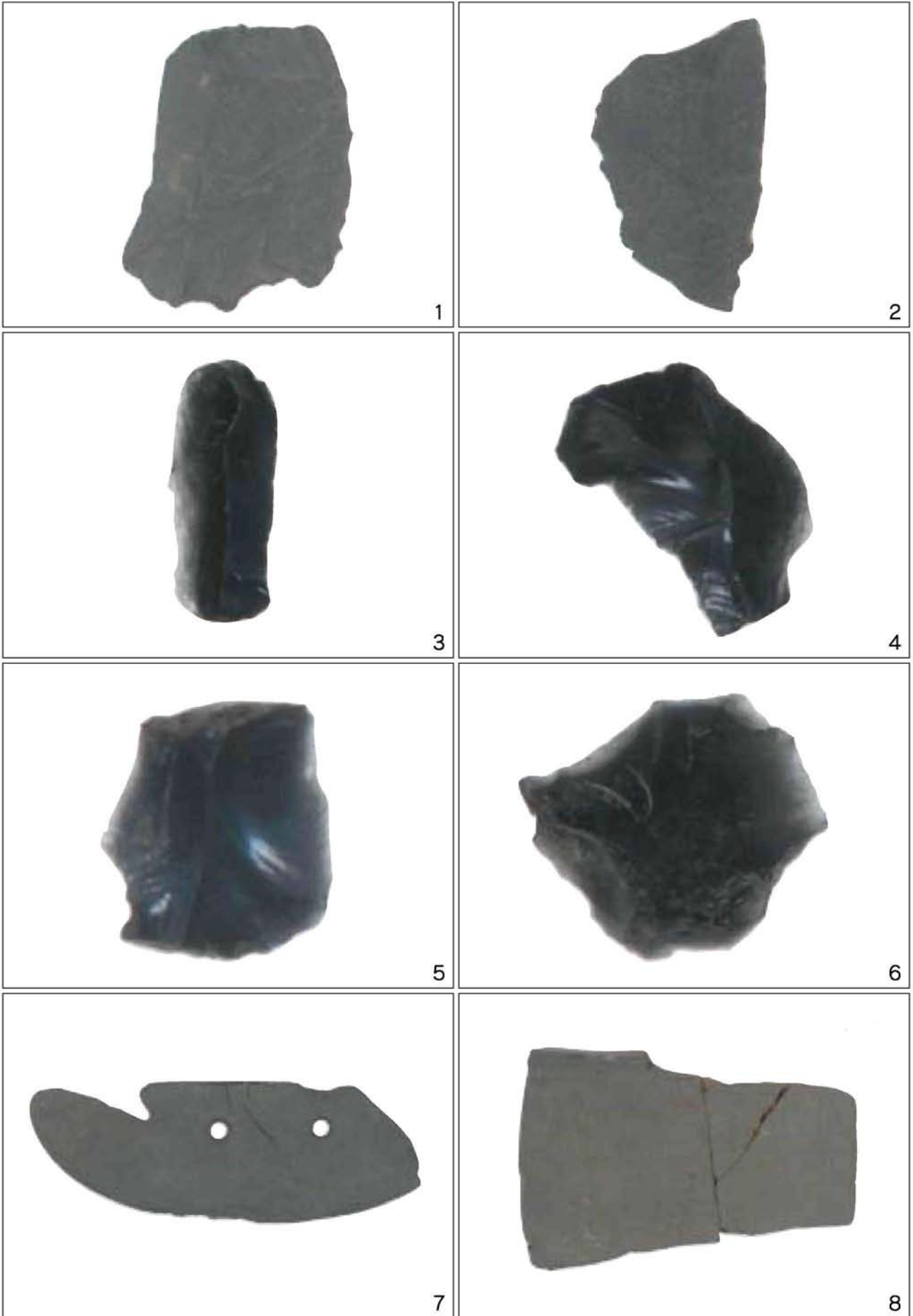
4. 野多目池から照天神社へと上がる切り通し(西から)
 写真右手側丘陵上に第2次調査地点あり



5. 第2次調査地点から北西の崖下(西から)
 野多目池の端で撮影。野多目池の水の影響でえぐられ、
 丘陵の岩盤が露出している。



6. 丘陵の岩盤(西から)
 下層は白く花崗岩の様相を残すが、上に行くに従い
 赤く風化し、さらに上は赤土となっている。



1. SK-1上層出土スクレイパー(5) 2. P-5出土スクレイパー(10) 3. SK-1出土スクレイパー(6)
 4. P-2出土スクレイパー(11) 5. P-4出土つまみ形石器(13) 6. SK-1出土打面調整剥片(7)
 7. SC-4出土石包丁(14) 8. 須恵器 器台(4)1. SC-1・SC-2 (東から)

序

福岡市には多くの文化財が分布しており、本市では文化財の保護、活用に努めております。しかし本市では各種の開発事業も多く、やむを得ず失われる文化財については記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は携帯電話基地局鉄塔建設に先立って調査された野多目B遺跡群第2次調査の報告です。野多目B遺跡群は縄文・弥生時代から人々が生活し、また、古墳や奈良時代の墓跡が存在するなど、長い期間継続して営まれた集落でした。

本調査は野多目B遺跡群の中央部丘陵上の調査で、発掘の結果、縄文・弥生・古墳時代の遺構・遺物が見つかりました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた、KDDI株式会社福岡エンジニアリングセンターをはじめとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山 田 裕 嗣

例 言

1. 本書は携帯電話基地局鉄塔建設に先立って、福岡市教育委員会が³、2006年11月13日～12月18日にかけて行った野多目B遺跡群第2次調査の発掘調査報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時に遺構を示す記号Sを付して検出順にS-1,S-2, のように通し番号をつけた。本文ではこの番号に遺構の性格を示すアルファベットをSのあとに付しSK-1のように記述する。
3. 本書で使用する方位は真北である。
4. 本書で用いた国土座標はKDDI株式会社福岡エンジニアリングセンターに御提供頂いた測量成果に基づいている。また、第2図はKDDI株式会社福岡エンジニアリングセンターに御提供頂いた測量図を改変して用いている。
5. 本書で使用した遺構・遺物実測図は福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課 赤坂亨・池崎譲二・本田浩二郎が作成し、製図は赤坂・上方高弘・石水久美子・櫻田恵里奈が行った。また、石材の鑑定に福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課 吉留秀敏のご協力を頂いた。
6. 本書で使用した写真は、赤坂・上方高弘が撮影した。
7. 本書の執筆・編集は赤坂が行った。
8. 報告書抄録は裏表紙に記載した。
9. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので活用されたい。

遺跡調査番号	0653		遺跡略号	NMB-2	
地番	福岡市南区野多目4丁目735番		分布地図番号	老司40	
開発面積	174.63㎡	調査対象面積	147.30㎡	調査面積	120.9㎡

本文目次

I. はじめに	
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	4
III. 調査の記録	
1. 概要	4
2. 層序	6
3. 遺構・遺物	6
IV. 小結	12

挿図目次

第1図 野多目B遺跡群の位置と地形 (1/4,000)	2
第2図 野多目B遺跡群第2次調査位置図 (1/444)	3
第3図 調査区北東壁・北西壁土層図 (1/40)	5
第4図 野多目B遺跡群第2次調査全体図 (1/80)	7
第5図 SK-1・SK-2・SK-3 (1/40)	8
第6図 SC-4・SD-5・SD-7 (1/40)	9
第7図 SC-4出土遺物 (1/3)	10
第8図 野多目B遺跡群出土石器 (2/3, 1/2)	11

巻頭図版目次

巻頭図版1	1. 野多目B遺跡群第2次調査全景 (南から) 2. SC-4 (北西から)
巻頭図版2	1. 昭和49年度撮影の遺跡付近航空写真 (上が北) 2. 照天神社本殿 (東から) 3. 野多目B遺跡群第1次調査地点を望む (南から) 4. 野多目池から照天神社へ と上がる切り通し (西から) 5. 第2次調査地点から北西の崖下 (西から) 6. 丘陵の岩盤 (西から)
巻頭図版3	1. SK-1上層出土スクレイパー(5) 2. P-5出土スクレイパー(10) 3. SK-1出 土スクレイパー(6) 4. P-2出土スクレイパー(11) 5. P-4出土つまみ形石(13) 6. SK-1出土打面調整剥片(7) 7. SC-4出土石包丁(14) 8. 須恵器 器台(4) 1. SC-1・SC-2(東から)

図版目次

PL1	1. 調査区南半全景 (北西から) 2. 調査区北半全景 (西から)
PL2	1. SK-1 (南西から) 2. SK-2 (北から) 3. SK-3 (東から) 4. SK-1・SK-3ベル ト (北西から) 5. SC-4 (南西から) 6. SC-4ベルト (南西から) 7. SC-4石 (南 東から) 8. SD-5・SD-7 (北東から)

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

平成18年5月24日付けでKDDI株式会社福岡エンジニアリングセンターより福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課宛に福岡市南区野多目4丁目735番の物件に関して、携帯電話基地局鉄塔建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号18-2-203）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である野多目B遺跡群（分布地図番号40老司 0146 遺跡略号NMB）に含まれている地点であり、この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上、平成18年8月21日に申請地内の確認調査を行い、現地表面下70cmで柱穴・土坑と思われる遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財第一課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成18年度に発掘調査、平成19年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお調査対象としたのは開発面積174.63㎡のうち、携帯電話基地局鉄塔部分の147.30㎡である。

調査期間は平成18年11月13日から12月18日までである（調査番号0653）。調査面積は120.9㎡、遺物はコンテナ2箱分出土している。また、整理作業と報告書の刊行は平成19年度に行った。

現地での発掘調査にあたってはKDDI株式会社福岡エンジニアリングセンターをはじめとする関係の皆様から発掘調査について御理解いただくと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して深い感謝の意を表します。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

事業主体 KDDI株式会社福岡エンジニアリングセンター

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課

平成18年度

調査総括 山口讓治（埋蔵文化財第一課長）

山崎龍雄（埋蔵文化財第一課調査係長）

調査庶務 文化財管理課 鈴木由喜

調査担当 埋蔵文化財第一課調査係 赤坂亨

調査作業 石川洋子 北條こず江 水田ミヨ子 林厚子 村山巳代子 遠山勲 濱地静子

小野山次吉 藤村正勝 花田直文

平成19年度

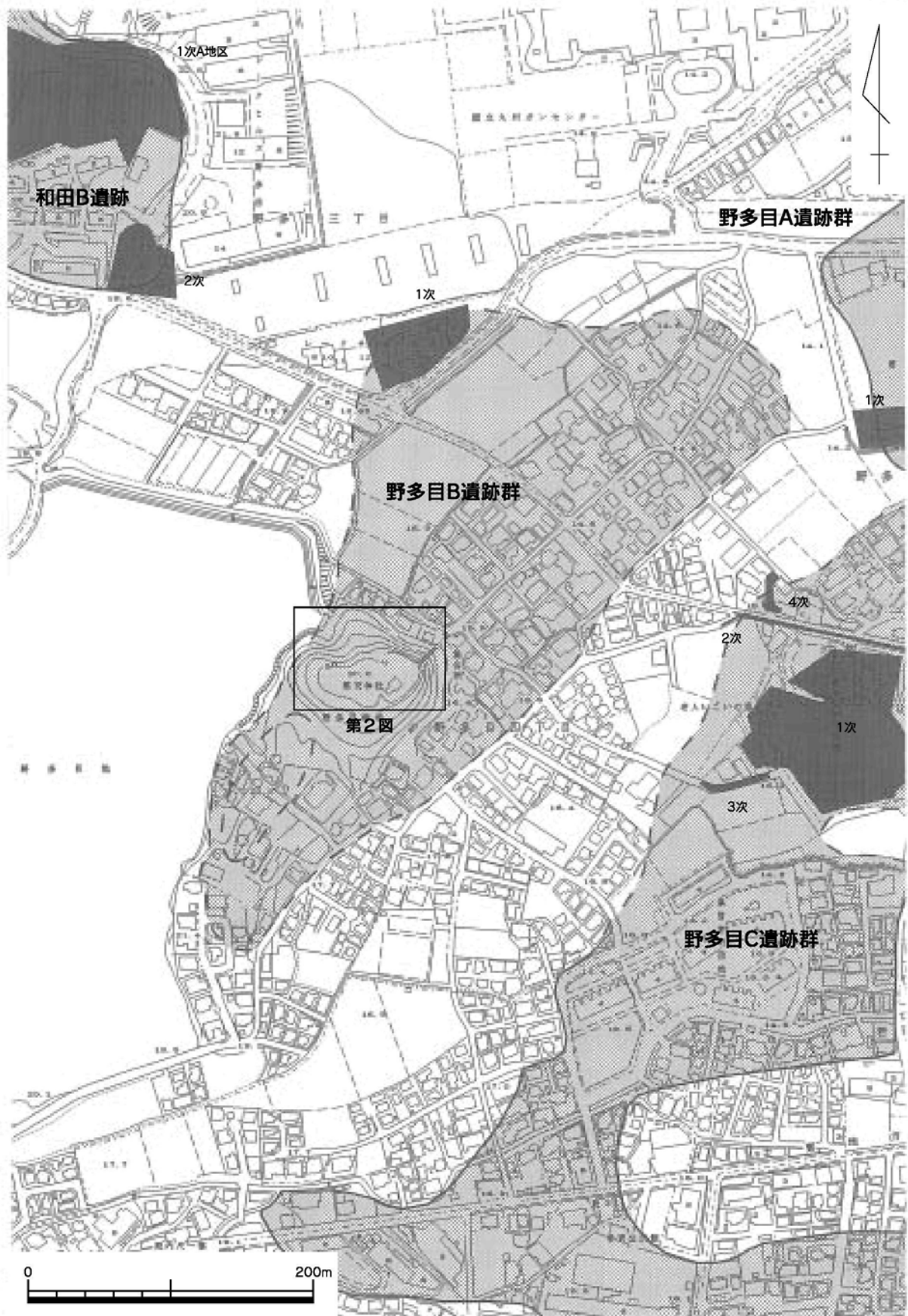
総括 山口讓治（埋蔵文化財第一課長）

米倉秀紀（埋蔵文化財第一課調査係長）

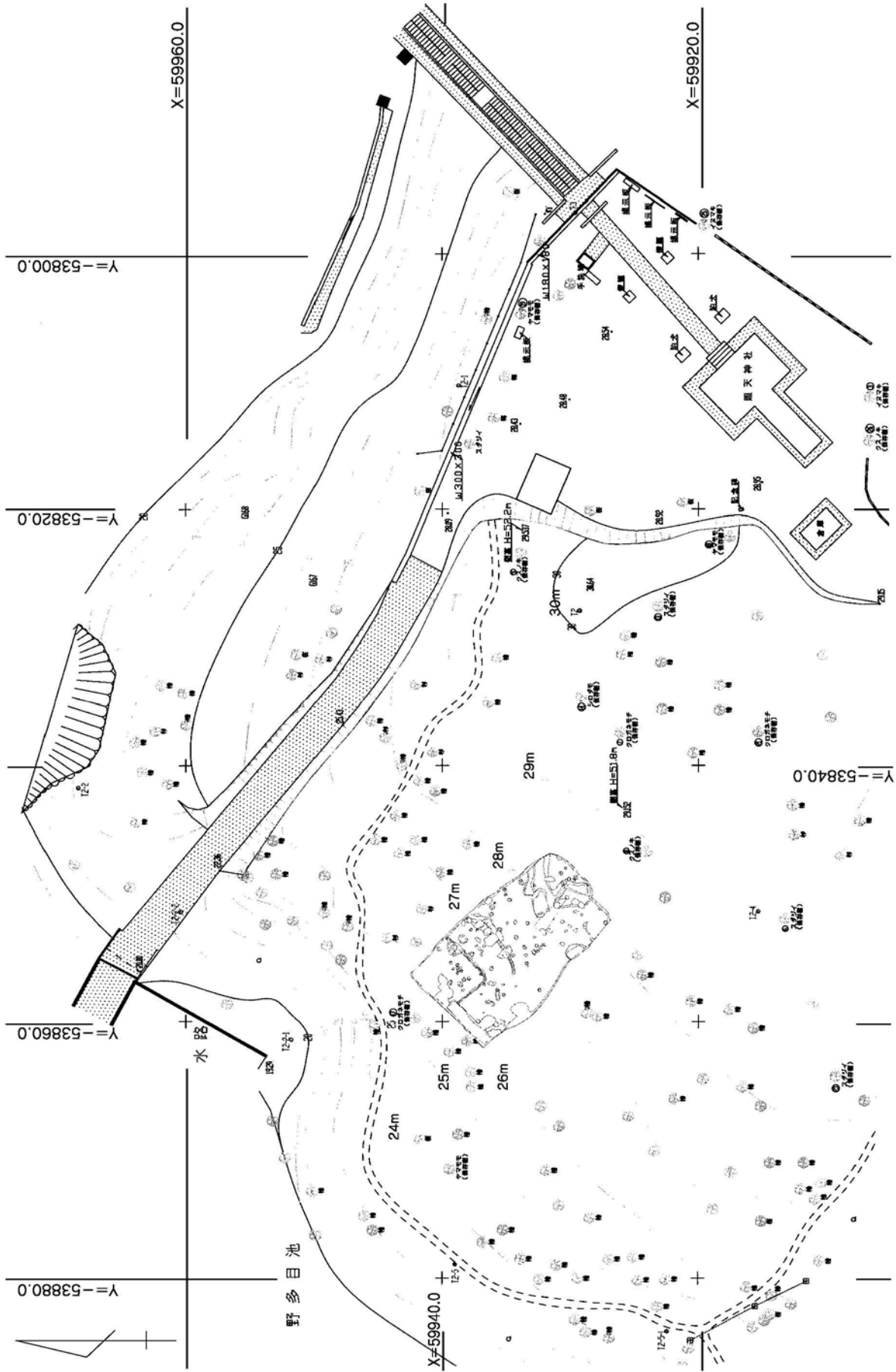
庶務 文化財管理課 鈴木由喜

整理担当 福岡市博物館学芸課 赤坂亨

整理作業 石水久美子 小田敬子



第1図 野多目B遺跡群の位置と地形 (1/4,000)



第2図 野多目B遺跡群第2次調査位置図 (1/444)

II. 遺跡の立地と環境

野多目B遺跡群中央部、照天神社境内地の丘陵西側斜面の調査である。調査地点は標高約26～29mを測る。丘陵一体は福岡市指定の巨木の多く残る広葉樹林であり、福岡市の景観保全地域に指定されている。野多目B遺跡群では丘陵下の沖積地で第1次調査が行われているが、丘陵上の調査は今回が初めてである。

この丘陵は油山からのびる花崗岩を基盤とする低丘陵であり、本遺跡群周辺では低丘陵と沖積谷部が枝状に分布している。本調査地点より北西側の崖下で基盤の花崗岩と、それが上層に行くに従って赤く変化していく様子が確認できた（巻頭図版2-5・2-6）。この赤い土が本調査地点の表土下遺構面となっている。同丘陵上南東約100mには野多目古墳群が存在しており、かつて1号墳～3号墳の3基の円墳があったとされるが、昭和45年の報告の段階で宅地造成のためすべて壊滅したと報告されている。現状でも墳丘は確認できず、昭和49年度撮影の航空写真でも現在よりも家の軒数は少ないものの、墳丘やその痕跡は確認できなかった（巻頭図版2-1）時期や規模など詳細は不明である。丘陵西側の野多目大池は、昭和45年発行の『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表』では野多目池縄文遺跡という遺跡名称で、石鏃や石匙などの縄文時代遺物とともに弥生式土器や太形蛤刃石斧が採集されたと報告している。

周辺では本調査地より北方240mの沖積地で野多目B遺跡群第1次調査が行われ、縄文時代後期の旧河道・溝、弥生時代前期の水田関連施設、8世紀後半の埋葬遺構と考えられる土坑墓群などが検出されている。また、本調査地点北西約450mの丘陵上で和田B遺跡の調査が行われており、縄文・弥生時代の遺構の他、古墳時代前期の古墳5基と木棺墓を検出している。

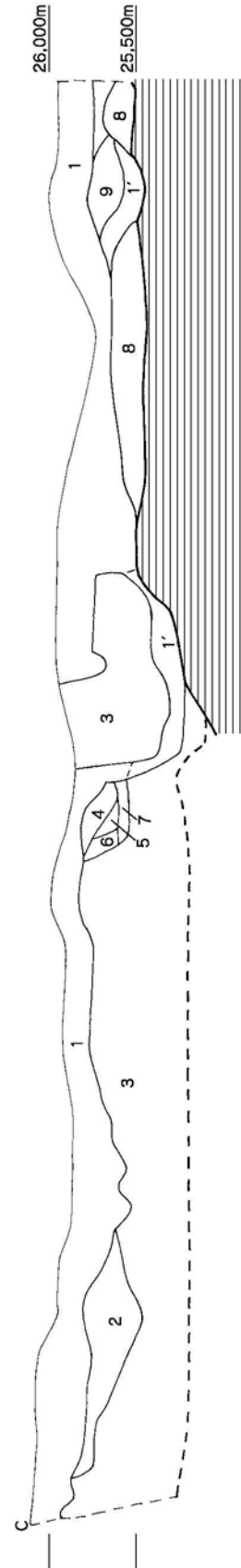
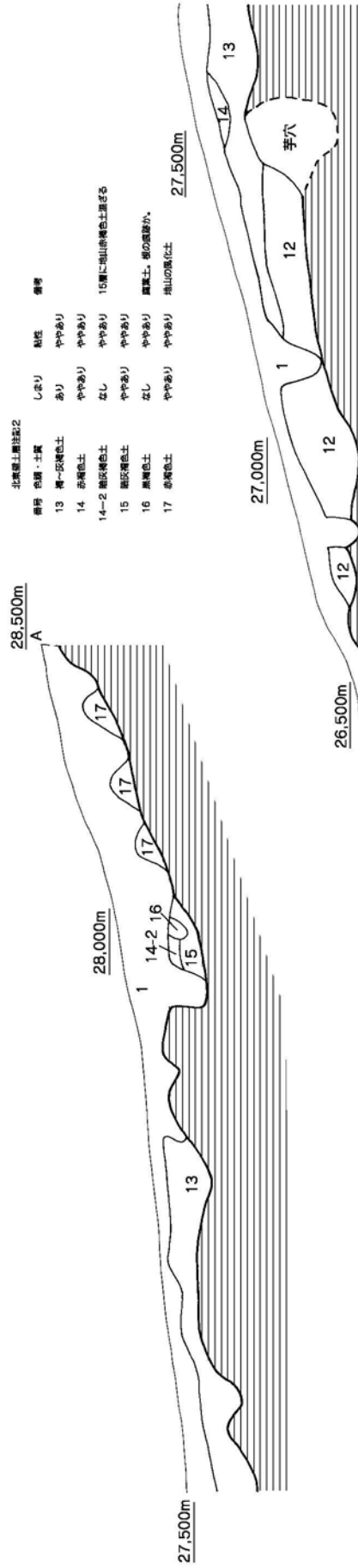
III. 調査の記録

1. 概要

平成18年11月13日～15日までバックホウによる表土掘削を行う。11月16日から作業員を入れ人力による遺構検出作業、および遺構掘り下げ作業を開始。12月8日、遺構掘り下げ完了。12月11日、調査区全景写真撮影を行う。同日より、20分の1平面図作成開始。12月12日、機材の一部撤収を行う。12月16日、20分の1平面図作成完了。12月18日、機材を完全に撤収し調査を終了した。

遺構は土坑3基、竪穴式住居1軒、溝1基、ピットを検出した。SK-1は斜面下側がややフラスコ状になっているピットで、黒曜石の破片が多く出土した。縄文時代の遺構である。SK-2は深さ10cmほどの浅い凹みで、古式土師器甕の胴部が出土した。古墳時代の遺構である。SK-3は木の根痕が多数入り込んだ浅い凹み。遺構でない可能性もある。土器片が多く出土。遺物の時期は弥生後期～古墳前期である。SC-4は推定で一辺5.5mを測る方形の竪穴式住居。壁溝が良好に残存していた。住居内南東側にピットがあり玄武岩の石が置かれていた。須恵器坏蓋・甕などが出土した。時期は古墳時代中期である。SD-5はSC-4の斜面上側に巡る溝。遺物少量。竪穴に伴う溝か。遺物はコンテナ2箱分出土した。

座標は国土座標を用いた。座標は光波測定器を用い、開放トラバースにより調査区内へ座標移動を行った。なお国土座標はKDDI株式会社福岡エンジニアリングセンターに御提供頂いた測量成果に基づいている。



第3図 調査区北東壁・北西壁土層図 (1/40)

2. 層序

層序は調査区北西壁と北東壁で確認した(第3図)。北東壁は傾斜に対してほぼ直行方向であり(第4図A-B)、北西壁は傾斜に対してほぼ平行方向である(第4図B-C)。表土は森林が形成した腐葉土であり、現地表面の標高は28.5m~26.0m前後である。現地表下約20~50cm前後で明褐~赤褐色土の遺構面となる。表土直下が遺構面になる部分と、褐色系の土(北東壁12・13層)を間に挟む部分とがある。古墳時代の住居跡SC-4は断面観察の結果、北西側の壁が残っていないことが確認された。SC-4遺構覆土は南東の一部(北東壁5~11層)を残し、他は後に削られてしまったようである。また現在この山林では山芋がとれるようであり、山芋は採集の際、芋の周囲に穴が掘られることが多く、本調査区内でも多くの現代の芋穴を確認した。

また北西壁北寄りでは明褐~赤褐色土の遺構面が確認できたが、西寄りでは確認できず灰褐~茶褐色土(北西壁3層)が遺構面となっていた。明褐~赤褐色土を確認するため北西壁西寄りをトレンチ状に掘削し、遺構面より60cm前後掘り下げた。その結果、北西壁1'層付近で3層の下に潜り込んでいくのは確認できたが、その先は不明である。丘陵は現在大きな起伏もなくなっただけであるが、各所で削られ、また再堆積がなされるなどの変動が数多く起こっているようである。

3. 遺構と遺物

本調査地点の遺構の時期は旧石器時代~古墳時代にわたるが、遺構面は1面のみである。本報告では遺構数が少ないため、遺構種別順ではなく遺構番号順に記述を行う。

土坑SK-1 (第5図・PL2-1, 2-4)

調査区南側、標高28.100m付近で検出した。2.1m×0.8mを測る平面略楕円形の土坑である。遺構の覆土は暗灰褐~暗褐色土であり、北西側の壁がオーバーハングしている(第5図C-D断面)。オーバーハングしている側が深くなっており、最大深さ60cmを測る。灰褐色の包含層の上から掘り込まれている(第5図A-B断面)。

遺物は古輝石安山岩(サヌカイト)製スクレイパー(5・巻頭図版3-1)、黒曜石製スクレイパー(6・巻頭図版3-3)、黒曜石製打面調整剥片(7・巻頭図版3-6)、黒曜石製剥片(8)、黒曜石製打製石鏃(9)が出土した。土器片も出土したが図化できるものは出土しなかった。5は上層、8は下層出土である。遺物の時期は5が縄文時代、9が弥生時代である。遺構の時期は縄文時代である。

土坑SK-2 (第5図・PL2-2)

調査区南側、標高27.500m付近で検出した。1.7m×1.0m以上を測る土坑である。深さ20cmを測り、底面は地山の傾斜とほぼ平行な角度である。西側半分が調査範囲外に伸びている。遺物は古式土師器甕の胴部が出土したが、図化できる大きさではなかった。古墳時代の遺構である。

土坑SK-3 (第5図・PL2-3, 2-4)

調査区東側、標高27.500m付近で検出した。2.0m×1.2m以上を測る平面楕円形の土坑である。深さ20cmを測り、底面は地山の傾斜とほぼ平行な角度である。木の根痕が多数入り込んだ浅い凹み状を呈しており、遺構でない可能性もある。

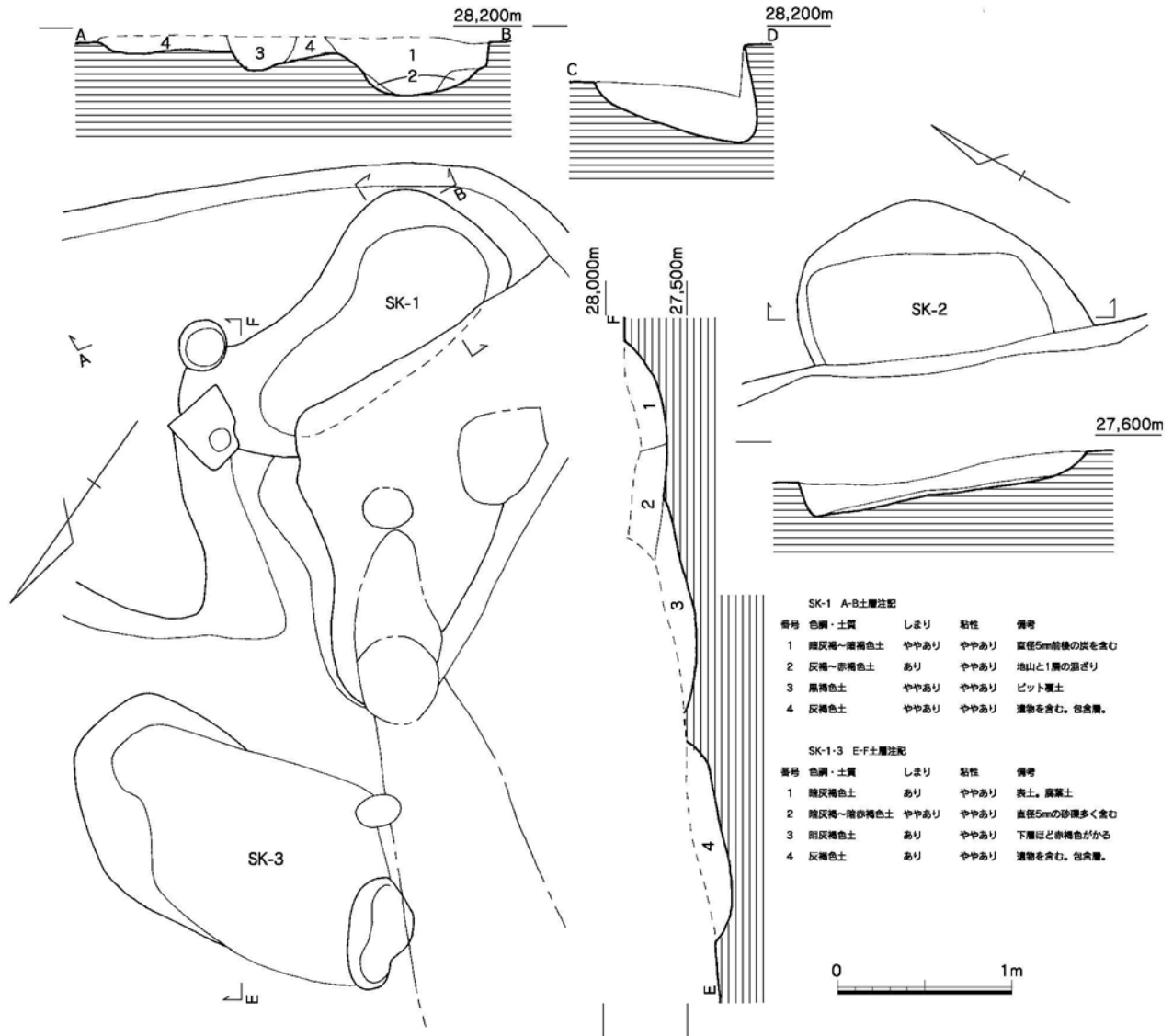
遺物は土器片が多く出土したが、図化できる大きさではなかった。遺物の時期は弥生後期~古墳前期である。



第4図 野多目B遺跡群第2次調査全体図 (1/80)

竪穴式住居SC-4 (第6図・巻頭図版1-2・PL2-5, 2-6, 2-7)

調査区北側、標高25.500~25.800m付近で検出した。方形の竪穴式住居である。北東~南西方向に軸をとり、南東辺4.5m以上×南西辺4.0m以上を測る。北西・北東側は調査範囲外に伸びている。南東・南西辺に幅約20m、深さ5~10cmの壁溝を有する。南東辺床面には土坑1.2m×0.8m、深さ32cmを測る土坑が付く。土坑内からは25×22cmの角閃石安山岩あるいは角閃ひ

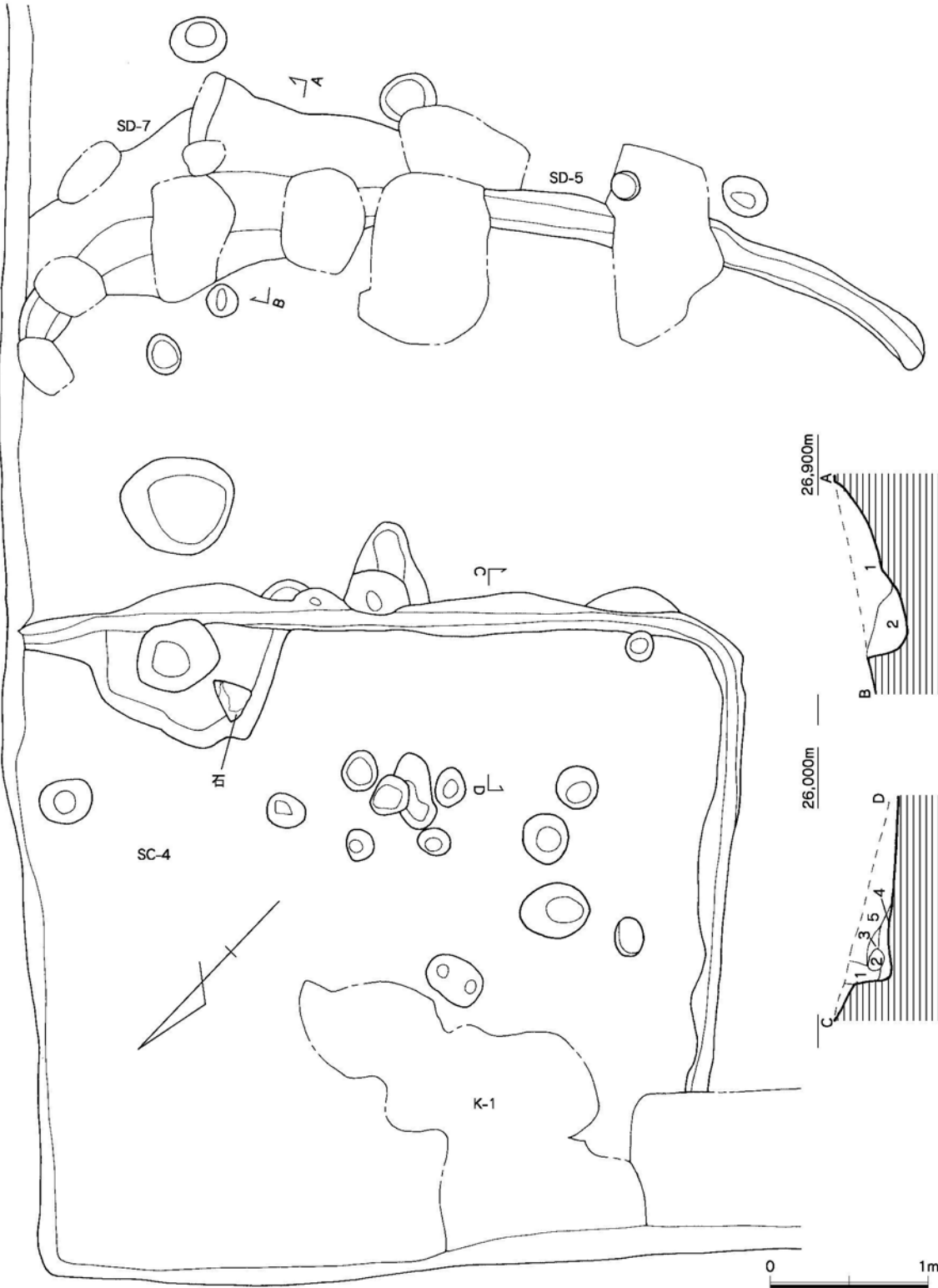


第5図 SK-1・SK-2・SK-3 (1/40)

ん岩?とみられる石が出土した。土坑からは焼土や比熱の痕跡は見つけられなかった。台石として用いられたものか。遺構の覆土の残りは不良で、住居北側ほど大きく削られているようである。土層はC-Dベルトと調査区北東壁で確認した。

遺物は須恵器の坏蓋片(1)、短脚高坏片(2)、器台脚部片(4・巻頭図版3-8)、土師器甕(3)が出土している。1は反転復元したもの。破片が小さくやや確度に欠けるが、復元径14.0cmを測る。表面に自然釉が付着する。2は3ヶ所に透かしを有する。焼成良好で、表面に自然釉が付着する。色調は灰色を呈する。3は三角形の透かしを二段有し、カキ目のあと波状文を二段施文する。色調は灰色を呈する。須恵器の年代は、九州須恵器編年。B期、陶邑編年TK-208～TK-23型式併行期と想定する。遺構の年代は5世紀の後半である。

またSC-4の遺構覆土内より堆積岩(泥質岩)製石包丁(14)が、SC-4内の攪乱K-1から輝緑凝灰岩製石包丁(15)が出土した。弥生時代の遺物である。



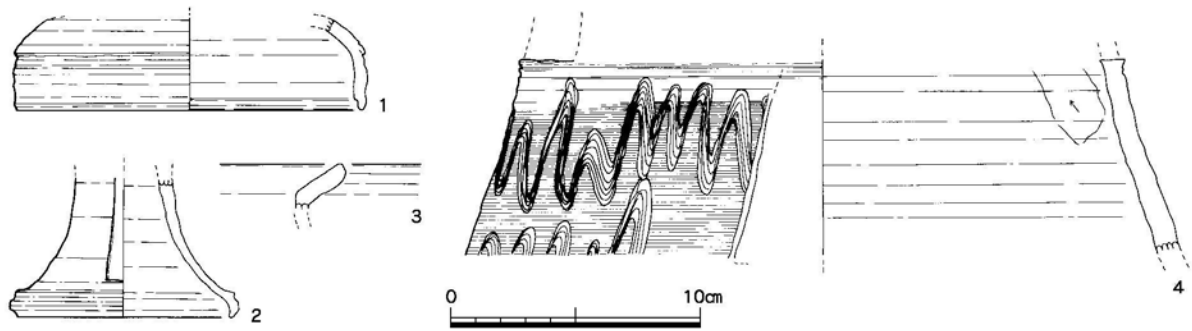
SC-4 C-D土層注記

番号	色調・土質	しまり	粘性	備考
1	灰褐～黒褐色土	ややあり	ややあり	
2	黒褐色土	あり	ややあり	木の根が
3	暗茶褐色土	ややあり	ややあり	5層よりやや細かい
4	灰褐色土	ややあり	ややあり	地山との混合
5	灰褐～茶褐色土	ややあり	ややあり	赤褐色土との混ざり

SD-7 A-B土層注記

番号	色調・土質	しまり	粘性	備考
1	灰褐色土	あり	ややあり	直径1cmのレキを含む
2	灰褐～羽赤褐色土	あり	あり	地山混ざる

第6図 SC-4・SD-5・SD-7 (1/40)



第7図 SC-4出土遺物 (1/3)

溝状遺構SD-5・7 (第6図・PL2-8)

調査区中央部、標高26.600～26.800m付近で検出した。SD-5は幅20～30cm深さ15cm前後を測る溝状遺構である。傾斜上側にむかって外湾しており、残存長3.0mを測る。平面楕円形の土坑である。SD-7は幅1m深さ30cm前後を測る溝状遺構である。傾斜上側にむかって湾曲しており、残存長2.5mを測る。当初は両者を別の遺構と認識していたため、別の遺構名を付けたが、溝底面の深さがほぼ同じであり、同一の溝状遺構であると考えられる。SC-4の傾斜上部に設けられた排水用の溝であろう。

図化可能な遺物は出土しなかった。

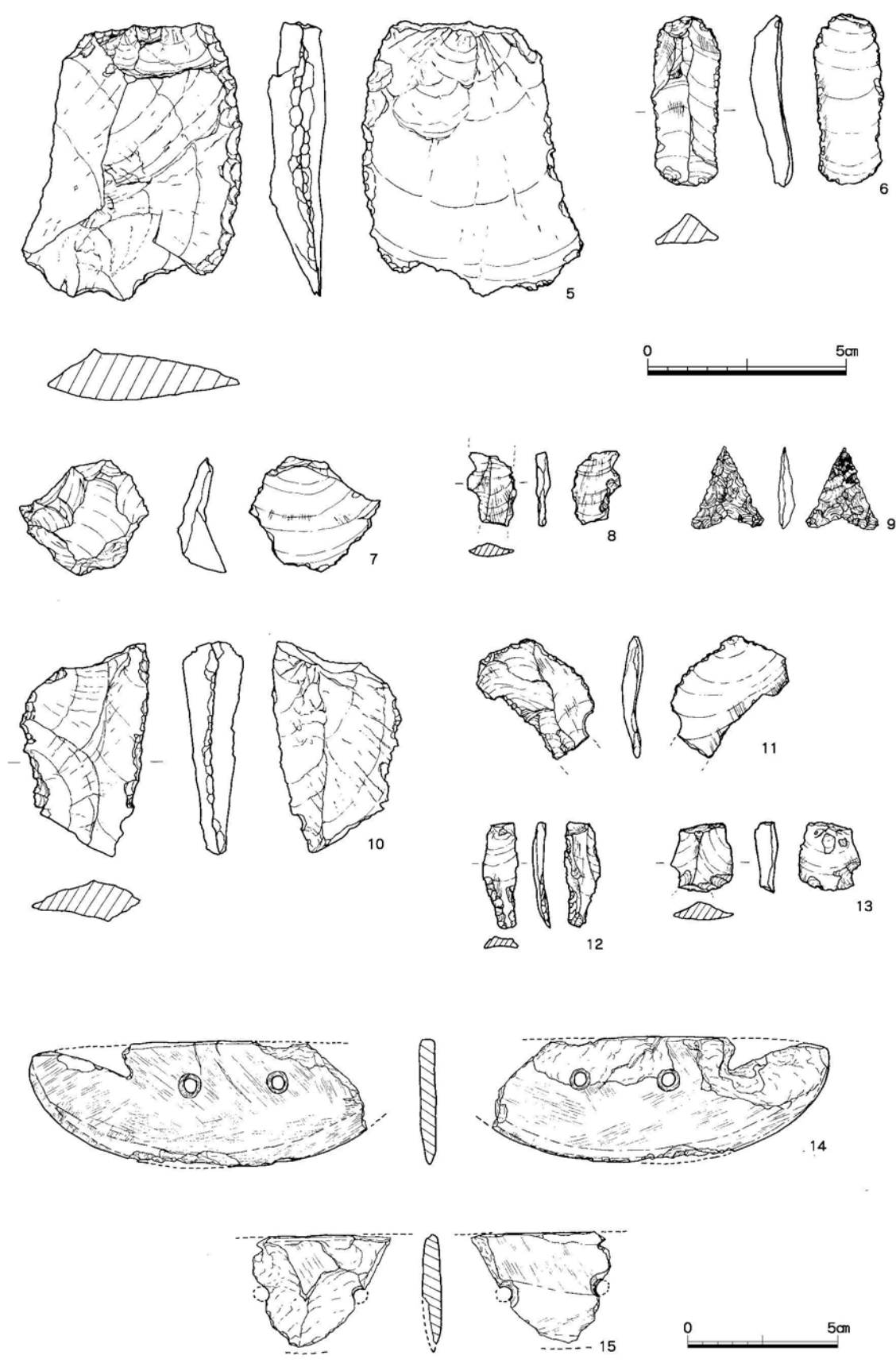
性格不明遺構SX-6 (第4図)

調査区南端の標高27.800m付近で検出した。この部分のみ地山に比べて土色が褐色がかり、土器・石器片が出土した。他の部分と同じ色調になるまで全体を掘り下げたが、明確な平面形状をとらず、その部分のみ低くなった。遺物が出土したため、遺構名を付けた。地山の低くなった部分に包含層が堆積したものと考えられる。

遺物は黒曜石製ドリル?(12)が出土した。土器片が出土したが、図化できる大きさではなかった。

ピットおよび遺構外出土遺物 (第8図)

調査区東側のP-4から黒曜石製「つまみ」形石器(13)が、P-5から古輝石安山岩(サヌカイト)製スクレイパー(10)が出土した。



第8図 野多目B遺跡群出土石器 (2/3, 1/2)

IV. 小結

1. 竪穴式住居SC-4について

類似した立地の和田B遺跡の調査および試掘調査の成果からは、本調査地点からは縄文・弥生時代の遺構が出土することが予想されていた。調査の結果、縄文・弥生時代の明確な遺構はSK-1のみであり、最も残りの良い遺構は5世紀後半の古墳時代中期の竪穴式住居SC-4であった。古墳時代の遺構は周辺の沖積地ではあまり検出例がなく、今回、器台を含む初期須恵器を伴う竪穴式住居が確認されたことは、丘陵上に当該時期の集落が形成されていたことを伺わせる。特に古墳時代前期の和田B遺跡の古墳や、前期中頃の卯内尺古墳・前期末の老司古墳以後、野多目・老司周辺の古墳時代の様相が分からなくなっており、本調査で5世紀後半の竪穴式住居を検出したことは、老司古墳以後の地域の歴史を考える際に重要な意味をもつものである。

2. 予想される丘陵上の遺構

今回の調査は丘陵の斜面の調査であったため遺構は少なかったが、本調査の包含層からの出土遺物から、周辺の遺構の存在について推定する材料が得られた。

縄文時代と弥生時代後期の遺物としては土器片と石器が多数出土しており、斜面のさらに上部の、丘陵平坦面に、当該時期の遺構が存在することが予想される。

古墳時代の遺構については、SC-4は斜面の傾斜が緩やかになる地点に造られており、この丘陵西側にまだ多数の古墳時代の竪穴式住居が存在する可能性がある。また、本調査地点南側に野多目古墳群1～3号墳があったとされるが、現状では宅地造成によって湮滅し痕跡も確認できない。しかし、当該時期の遺構が確認されたことから、この丘陵上にはこの3基以外にも、いくつかの古墳が存在していた可能性が高い。特に丘陵平坦面の現標高30m付近、現在の照天神社の境内裏には、高まりをもった場所があり、未確認だが古墳墳丘の可能性もある。

参考文献

野多目池縄文遺跡・野多目古墳群

塩屋勝利ほか『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表 第2集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第9集

野多目B遺跡群 (第1次)

吉留秀敏ほか1995『野多目台』福岡市埋蔵文化財調査報告書第413集

和田B遺跡 (第1・2次)

吉留秀敏ほか1995『野多目台』福岡市埋蔵文化財調査報告書第413集

瀧本正志1998『和田B遺跡II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第572集

須恵器について

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

舟山良一1998「須恵器の編年 九州」『古墳時代の研究 6土師器と須恵器』雄山閣

圖 版



1.調査区南半全景（北西から）



2.調査区北半全景（西から）



1.SK-1(南西から) 2.SK-2(北から) 3.SK-3(東から) 4.SK-1・SK-3ベルト(北西から)
 5.SC-4(南西から) 6.SC-4ベルト(南西から) 7.SC-4石(南東から) 8.SD-5・SD-7(北東から)

報告書抄録

ふりがな	のため							
書名	野多目B遺跡2 -野多目B遺跡群第2次調査報告-							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	986							
編著者名	赤坂亨							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
野多目B遺跡群第2次	福岡県福岡市南区野多目4丁目735番	40130	0146	33 32 20	130 25 12	20061113 ~ 20061218	120.9	携帯電話 基地局鉄 塔建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・主な遺物				特記事項	
野多目B遺跡群第2次	集落	縄文・弥生・古墳時代	集落-縄文時代・弥生時代・古墳時代/土坑3、竪穴式住居1溝1ピット多数-縄文弥生土器片+須恵器+石器					
要約	野多目B遺跡群中央部、照天神社境内地の丘陵西側斜面の調査である。調査地点は標高約26~29mを測る。丘陵一体は福岡市指定の巨木の多く残る広葉樹林であり、福岡市の景観保全地域に指定されている。野多目B遺跡群では丘陵下の沖積地で第1次調査が行われているが、丘陵上の調査は今回が初めてである。遺構は縄文時代の土坑、古墳時代中期(5世紀後半)竪穴式住居1軒・溝1基などを検出した。本調査地は傾斜地のため遺構が余り存在していないが、斜面上部の丘陵平坦面には多くの遺構が存在すると想定される。							

野多目B遺跡2

2008年(平成20年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
(092)711-4667

印刷 慶和印刷株式会社
福岡市博多区東那珂1-15-1
(092)474-4881